（様式１）特別支援学校

令和4年度　学力向上指導改善プラン

ひまわり特別支援学校長　山口　貴久

学校教育目標	人との豊かなつながりの中で、一人一人の自立と社会参加を目指し、たくましく生きる力を育成する
推進主体	校務運営委員会・各種委員会・担当者会・研究部会

学力に関する前年度の状況・経年の課題等			4月			2～3月	
			学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 （指標となる数値等）	具体的な行動目標 （成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価 （今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
学力の状況	授業、各種調査・テストなどからうかがえる状況（各教科等）	学習指導要領改訂に伴い、特に自立活動の評価において3観点（①知識・技能の習得②思考力・判断力・表現力の育成③学びに向かう力、人間性の涵養）を意識した評価を児童生徒の実態に応じた指導を行うことで実施する必要がある。	【教育課程】 3つの観点からの個々に応じた指導実践が可能となる、カリキュラムを再構築する。	3観点を意識した指導となるよう個別の指導計画を作成する。	作成した指導計画に基づき指導・評価し、個別の指導計画の見直しを行う。	今年度の個別の指導計画を作成する際には、全教員で3観点について確認するとともに、3観点を踏まえた指導目標の設定と評価を、各学部や学級で行うことができた。	A
		運動動作面における指導と評価の一体化を更に目指し、目標と期間を明確化し、年間を通したPDCAサイクルを踏まえた取り組みを進める必要がある。	【身体の動き】 からだの学習の目標と期間を明確化し、児童生徒にとって日常生活に必要な変容を目指す。	短期目標と長期目標を設定し、課題解決までの具体的なビジョンを明示し実践する。	からだの学習における具体的な到達目標をルーム及び学部で共有する。 日常的に動画等で学習の様子を記録し、自己評価、他者評価をし、授業の改善を図る。	年3回のからだの学習会をルーム及び学部ごとに実施し、具体的な目標を短期的、長期的な視点で共有することができた。指導を振り返る際に関係教員が動画で確認することにより授業の改善につながった。しかし、からだの学習における短期目標や長期目標の期間を明確化することや個々の発達段階での指導方法をより明確に行うことは課題である。	B
		教員の指導力を向上させ、細やかなアセスメント、指導目標、方法、評価を共有しながら主体的な学びを創造する研究を進めたい。	【コミュニケーション】 表出手段の獲得を目指した取り組みを確立するために、細やかなアセスメントを実施することで児童生徒個々に応じた指導・支援をの方法を明らかにする。	個々の児童生徒が小集団の中で、自分にあった表出手段で表現する。	細やかなアセスメントを実施することで、発達段階やストロングポイントを把握し、表出手段の獲得を目指す。活用できる補助器具を探る。	本年度は専任の特別支援コーディネーターを配置することができず、支援体制が整わなかったため、校内支援・校外支援共に展開することが十分できなかった。学部長及びルーム長とクラス支援部の職員が主導となり、からだの学習や日常生活における自立に向けた支援の方法を相談することができた。また、全教員で共通理解することで児童生徒個々に応じた指導・支援に取り組めた。細やかなアセスメントを実施するための統一したアセスメントシートづくりを継続していく。	B
		コロナ禍の中、限定的となった交流及び共同学習を推進するために、併設校及び居住地校や交流校、事業所との連携を今一度深め、目標と手立ての共有を図ることが必要である。	【交流及び共同学習】 感染症対策を十分に行い、交流及び共同学習の実施方法を工夫する。	交流を通してターゲット課題を共有する。	交流校と連携を密にし、実施可能な直接交流を探る。 オンライン授業や手紙、通信など双方向でやり取りをし、間接交流の工夫を進める。	年度当初に本校の管理職や学部長と併設校の管理職や交流担当で、交流及び共同学習の意義等を確認した上で、手紙やオンラインでの交流、掲示物等での活動の様子の紹介等を提案して、各学部で取り組んだ。 来年度は、感染症対策の緩和が考えられるため、感染状況を見ながら、従来の交流及び共同学習が行えるように準備を進める。	B
		教職員、保護者の進路に対する意識向上を図るために、市内の高等部卒業後の進路の現況を知ることが必要である。	【進路】 卒業後の生活を見据えて、個々の児童生徒につけるべき力を検討する。 高等部卒業生の追指導を充実させる。	進路の情報を教職員・保護者が共有する。	・コロナ感染状況を踏まえながら事業所見学会を実施し、積極的に新規福祉事業所の開拓を行う。また高等部卒業生の追指導を行い情報の共有を行う。	保護者の進路研修会では、本校高等部の進路指導（現場実習のねらいと実際の取り組み）について紹介した。また、昨年度に引き続き、卒業後生活を見据えた進路についてのグループ討議を行い、課題を共有することができた。事業所見学会や地域社会共生フェスティバルについては、新型コロナウイルスの感染状況から資料提供や紙面開催となったので、来年度は実施できるよう準備を進めていく。卒業生の追指導に関しては、引き続き関連事業所と連携をとり、迅速に対応していく。	A
学力向上に係る学習習慣等の状況	授業、相談、各種調査・学校評価などのアンケート調査等による児童・生徒の状況	コロナ禍の中、感染症対策を進める上で摂食指導時の衛生面での配慮は今後もさらに進める必要がある。	【健康の保持】 個々の児童生徒の摂食状況を丁寧に保護者、関係各機関との情報共有を密に行ったうえでアセスメントを行い、具体的な目標設定を行う。	個々の実態に応じた支援を行い摂食のスキルが向上する。	個々の児童生徒の実態に応じた摂食指導をチームで実施する。摂食指導を行う教室の安全・安心な環境設定を図る。	パーテーションの設置や換気、消毒の実施、照明の調整等安全安心な環境設定を行った。 支援部会を設けたことで、摂食指導について、校内での情報共有や意見の交流ができるようになった。 個々の実態の把握や支援の仕方、目標の設定等について専門家の意見を参考に保護者と情報共有を行いながら適宜見直しを図るようにする。 教師の摂食に関する実態把握及び指導スキルの向上を図る。	A
		安心安全な医療的ケアの実施はもちろん、基礎疾患を持つ児童生徒や体調管理が難しい児童生徒が多く在籍する本校において、引き続き新型コロナ感染症拡大防止を徹底的に進める必要がある。	【健康の保持】 医療的ケアに関する研修を充実させるとともに、職員全体のコミュニケーションと共有を図る。	医療的ケアについての知識理解を深め、適切かつ確実なケアを行う。	外部講師による研修会を開く。 医療的ケアサポート会議等で看護職員と教員との共通理解を探る。 ヒヤリハット事案についてこまめにケース会議を開き、職員で共有する。	気管切開のある児童生徒について、登下校時に教師と看護師が保護者等に引継ぎを行うようになった。 医療的ケアについて新転任者研修を実施する等、教員の専門性を高める研修が出来た。 医療的ケアの計画書が整理できたことで、行事や交流等の打合せが計画的に出来るようになった。 重大なヒヤリハット事案については、その日のうちに関わった者が情報共有することができた。 本年度の取り組みを来年度も継続する。	A
校内研究・研修の状況	校内研究の状況	学部内で汎化されてきたペアや集団、交流学習での活動が、次のステージで発揮できる確かな学力として、ステップアップにつなげていくことが必要である。	【研究】 子どもの実態に応じた質の高い授業を行うために、日常的に授業の評価・改善を行う。	日ごろから適切なアセスメントを行うことで、指導・支援を充実させる。	日常的にチームで授業を振り返り、指導改善を行う。 授業研究会を実施し、外部から評価を受ける。	年3回の授業研究会を実施し、ルーム及び学部ごとにテーマに応じた授業づくりに取り組んだ。外部からの指導助言を受け、指導改善に活かすことができた。日常的に短時間での振り返りの場を設定し、iPadを活用したチームのアセスメントを行うことで指導・支援の充実に努めた。	B
	校内研修の状況	災害や不審者対応、体調の急変等を想定してした緊急時対応訓練を年間を見通して定期的に実施し、日常的に全職員が対応できる力をつける必要がある。	【危機管理】 安全確保に向けた緊急対応訓練の実施と具体的なシュミレーションを行う。	災害時や不審者侵入、体調急変時の救急対応ができる力を身につける。	具体的な場面や状況を想定し、シュミレーションした訓練を実施する。 災害時や緊急時のマニュアル、必要備品等の整備を精査し整備する。	学期に1回ずつ、具体的な場面や状況を想定した緊急対応シュミレーション訓練を行った。 災害時や緊急時のマニュアルの作成、必要備品等の整備を行った。 地震及び火災発生を想定した避難訓練について、時間や場所を非通知設定で行い、緊急対応ができるようにした。 本年度の取り組みを引き続き行い、状況に応じた緊急対応ができるようにしていく。	A
家庭・地域等との連携	家庭・地域等の状況	コロナ禍の中、保護者との相互理解を進めるためにきめ細やかな情報提供と意見交流を行う必要がある。その方法についてはICTを活用するなど工夫が必要である。	【開かれた学校】 保護者との目標共有を図る。 放課後等デイサービスとの情報共有を進める。 地域人材との活用を目指す。	情報提供する機会、意見交流する機会を増やす。	学校地域運営協議会、保護者全体懇談会やニーズにあった研修会を開催する。事業所連絡会を開催し、福祉との連携を図る。 オンラインを使った会議の開催等、コロナ禍での保護者との情報共有の機会を作る。	学校・家庭・福祉の連携を深めるため、相談支援事業所、放課後等デイサービス、学校が一堂に会しサービス利用における家庭との連携体制の構築や情報共有を行った。また、授業参観を通して、学校での様子を知ってもらうよい機会となり、児童生徒の実態について共通理解を図ることができた。保護者との連携においては、学校と保護者が協働して研修会を計画し、保護者と共に様々な情報や現状と課題を相互に共有することができた。	A
		特別支援教育のセンター的機能として、コロナ禍であってもニーズに応えられるよう相談方法を工夫していく必要がある。	【センター的機能】 市立の特別支援学校ならではのネットワークを利用したきめ細やかな相談支援を充実する、	前年度の相談件数を上回る。	相談会、研修会を発信・案内し、相談後のアフターフォローを行っていく。	本年度は、専任コーディネーターを設けることが出来なかったため、学校としてのセンター的機能を十分に発揮することができなかった。4月より専任コーディネーターを設置できれば、従来のセンター的機能が発揮できるように再構築を図る。	B
	小・中・高における教科連携等の状況	キャリア教育の全体計画を見直し、基礎的汎用的能力と個別の指導計画との関連性を見出し、キャリア教育の研修のあり方を検討する必要がある。	【社会参加】 卒業後の生活を具体的にイメージし、各学部間で将来像の共有化を図り、系統的なキャリア教育を推進する。	高等部卒業後を見据え、個別の指導計画の重点目標の見直しを図る。	キャリア教育全体計画から、個々のキャリア教育の計画を作成し、個別の指導計画に反映させる。	キャリア教育の校内研修を1学期に行い、キャリア教育全体計画についての共通理解を図るとともに、自立活動と関連させた指導のあり方について学部ごとに検討することができた。また、高等部での具体的な取り組みを紹介し、卒業後の生活を見据えたキャリア教育の視点から個別の指導計画を見直すことの重要性について認識を深めることができた。今後は、学部間での系統的なキャリア教育に取り組んでいきたい。	B